



選択の科学

—コロロンビア大学ビジネススクール特別講義—

シーナ・アイエンガー著 櫻井祐子訳

文藝春秋 2010

商学部教授 奥瀬 喜之

あるスーパーマーケットにおいて、6種類のジャムを並べた時のほうが、24種類のジャムを並べた時よりもジャムを購入した人の割合が高かった。

これは、本書の著者であるシーナ・アイエンガーが行った店頭実験によって確認された、選択肢が多いほど売上は下がってしまうことを示す「ジャムの法則」として知られる知見である。

アイエンガーは「選択」を研究する、アメリカ・ニューヨークのコロンビア大学ビジネススクールに所属する研究者である。彼女は冒頭のジャムの実験など、さまざまな選択の研究を行っていること、他、全盲の研究者であることでも知られている。

アイエンガーが「選択」に興味を持つようになったのは彼女の生い立ちに関係している。敬虔なシーク教徒である両親はインドから北米に移住。アイエンガーは、服装や身だしなみなどシーク教徒の厳格な戒律に従いつつも、自由闊達なアメリカの教育を受けることになる。アメリカの学校の「自分のことは自分で決める」ことが尊重される

教育方針は、高校に上がる頃には全盲になっていたアイエンガーを勇気づけるものとなった。すなわち彼女は、人生を「選択できない」出来事の重なりとみなすのではなく、「選択」の文脈の中に生かされているとみなすことによって希望を見出すことができることに気づくのである。これがアイエンガーが「選択」を研究対象とするようになった端緒である。

本書を読んでもみると、我々は普段あまり意識していないが、常に選択を繰り返していることに気づかされる。選択の連なりのもと、連続的な選択のもとに、現在、自分がおかれた状態にたどり着いていることに気づかされる。

「そんなはずはない、自分は好きで今こうしているのではない」という読者もいるかもしれない。しかしながら、もし仮にそうだとした場合、そのような制約条件下においても、選択できることはあるのではないだろうか。この拙稿を目にしているあなたは、これからどのような選択をしていくのだろうか。